

戒山坊錄

Benjamin Joseph Sandahl

あらすじ

とある貧しい寒村の廃寺に住み着いた僧、戒山は犬肉は食う、酒は飲むの破戒僧で、碌に経も読めず、自分の名を書けたかどうかも怪しい坊主であった。ある日、寺の石段に生まれて間もない赤ん坊が泣いている。戒山はその赤ん坊を抱え、村の家々を廻るが、誰も赤ん坊のことを教えようとはしない。それもそのはずで、その赤ん坊は間引かれるはずだった子であったのだ。赤ん坊のことを教えれば村八分にされることを村人たちは知っていた。泣く力もなくなった赤ん坊を抱いた戒山は川原に出て、目に見える物を次々と赤ん坊に教え始める。

登場人物

戒山(40) 廃寺厳真寺に住み着いた坊主

婆さま(68) 寒村に暮らす貧農の老婆

○貧村・俯瞰

雪の残る山間の村。

迫り出した山裾に沿うように川が流れ、僅かばかりの緩斜面に水の抜かれた小さな田圃が刻まれている。粗末な小屋のような藁葺きの家屋が点在しているが人気はない。

○同・田圃

稲刈り後の稲株の残る田圃で、着物の裾をはしより、尻丸出しで力んでいる伸びた頭髪、無精髭の坊主、戒山(40)。

大きな体躯。汚れて色が変わった所々綻んだ襦袢の上に、色褪せた墨染の法衣を荒縄で留め、素足に半ばほどけた草履を履いている。破れて用をなさないような網代笠を背中に落とし、首からは極端に大きな数珠を下げ、腰縄に大きな瓢箪が留めてある。

戒山「(吃音ぎみに)な、なにも食わんでも、お

んこはひりたくなるから、ふ、不思議じゃ」

力む戒山。

ブツと大きなおならを放つ。

戒山「屁こいてばかりで、み、実は出んのう」

股ぐらを覗き込み、

戒山「へへ……、しゃ、しゃらさぶいんで、か、

隠れとる」

ジョボジョボ……と小便をする。

小便の湯気が戒山を包む。

表情の緩んだ戒山が――、

ブルツと震える。

タイトル

『戒山坊録』

○同・径

寒そうに歩き来る戒山。

笠を被り、手には欠けた茶碗を持っている。

○婆さまの家・表

古い小さな貧農の家。

戸の前に寒そうに立つ戒山、念仏らしき経を唱え始める。

建付けの悪い戸が開き、顔を出す顔に深い皺の刻まれた野良着姿の婆さま(68)。

戒山、右手で片合掌し念仏らしきを唱え、左手に持った茶碗を突き出す。

婆さま「戒山坊かえ。生臭坊主にくれてやる物は
いっさらねえずら」

戒山「そ、そんなこと、言わんでーで。わしのう、
腹減ったのう、さぶうてのう」

婆さま「腰に酒があるら」
笠を持ち上げ、

戒山「は、般若湯は、しょ、小便ばかりで、お、
おんこは出ん」

婆さま「おんこ？」
戒山「おお、そ、そうじゃ。婆さまあ、よかこと、
き、聞かせちやる」

婆さま「いらんわ」

戒山「そ、そう言わんで、聞きさらし」

婆さま「なんじゃい」

戒山「あ、あんな、野糞ひるら」

婆さま「せんわ」

戒山「野糞るとき、い、いっとーさぶいんは、ど、どこか知っとーか」

婆様「そんなもん、知らんわ」

ニツと笑む戒山。

戒山「し、尻の穴が、いっとーさぶい」

婆様「∴∴」

戒山「の、野糞ひるときは、し、尻の穴を、隠してひるさ。こんすれば、ちいとは、さ、さぶうなくなる」

婆さま「尻の穴を隠してどうやってひる？」

戒山「（考える）∴∴」

婆さま「帰れ帰れ」

と、ガタピシと戸を閉める。

立ち尽くし考えている戒山。

戒山「ば、婆さまあ∴∴」

返事はない。

笠を背に落とし、瓢箪を叩る戒山。

寒そうにトボトボと去って行く戒山。

○ 厳真寺・土塀沿いの小径（夕）

籠もるような鳥の鳴き声――。

山門に上る石段に続く小径。崩れた土塀が
続いている。

笠を背に落とした戒山が瓢箪の酒を呷り
ながら寒そうに歩き来る。

鳥の鳴き声に混じり、どこからか聞こえる

赤ん坊の泣き声。

立ち止まる戒山。

戒山「？」

○ 同・石段（夕）

山門に上る崩れた石段に、ボロ布に包まれ
た赤ん坊が泣いている。

驚きの表情で立ち尽くす戒山。

戒山「あ、あああ……」

周囲を見回す戒山。

恐る恐る赤ん坊を抱きあげる。

激しく泣く赤ん坊。

戒山、困ったように慌ててあやし始める。

赤ん坊の泣き声が少し弱まり――、
やがて、泣き止む。
表情を緩めた戒山が、赤ん坊をあやしなが
ら石段を上っていく。

○貧村・俯瞰（朝）

周囲の山々に遮られた朝陽が、村の大半に
影を落としている。

○婆さまの家・表

閉ざされた戸の前に立つ襦袢一枚の戒山。
法衣に包んだ赤ん坊を抱いている。
赤ん坊は泣きやんでいる。

戒山「婆さまあ」

返答はない。

戒山「婆さまあ、お、おるかあ」

婆さま「（家の中から）まあた戒山坊かえ」

戒山「あ、あんなあ、婆さまあ――」

戸が開き、顔を出す婆さま。

婆さま「生臭坊主にくれてやる物はないと――」

——（赤ん坊を見て絶句）

戒山「あんなあ——」

婆さま「どこぞから拾ってきた？」

戒山「……」

婆さま「その赤子じゃ！」

戒山「て、寺の石段におった」

泣き始める赤ん坊。泣き声は弱弱しい。

あやしなから、

戒山「どこぞの子か、し、知らんかのう」

婆さま「知らん知らん。うらあそんねなもんは知

らんけ」

そそくさと戸を閉じる婆さま。

戒山「婆さまあ……」

婆さまの返答はない。

戒山、泣く赤ん坊をあやす。

婆さま「（家の中から）戒山坊」

戒山、閉じられた戸に顔を向ける。

婆さま「（家の中から）わるいことは言わんで—

で、その赤子をぶちやってこ—」

戒山「……」

婆さま「（家の中から）その赤子は間引かれるはずじゃった子ずら。知っと―者がおっても知らせる者はにゃ―」

戒山、歩き去っていく。

婆さま「（家の中から）村八分にはなりたかないけ―」

○吾作の家・表

傾いた藁葺きの粗末な家。

戸の前に立つ赤ん坊を抱いた戒山。

建付けのわるい戸が開き、中から顔を出す

吾作。

吾作、赤ん坊を見るなり、慌てて戸を閉める。

戒山「……」

○茂助の家・表

ピシヤリッと閉まる戸。

戸の前に立つ赤ん坊を抱いた戒山。

○貧村・小径

赤ん坊を抱いた戒山が歩いている。
反対方向から歩き来た鋤を担いだ村人、戒
山の抱く赤ん坊に気付くと、慌てて脇の
田に入り、戒山を避けるように迂回する。

○ 同・村境

路傍の古く小さな道祖神——にこやかに
寄り添う男女像が彫られている——に赤
ん坊を抱いた戒山が腰掛けている。
寝ている赤ん坊のひび割れた唇を。

○ 厳真寺・山門（夕）

朽ち崩れ、かろうじて建っている色褪せた
山門。

○ 同・本堂・表（夕）

荒れた境内に建つ、土壁の剥げ落ちた本堂
から漏れる（室内で焚いている焚火の）明
かり。

○ 同・同・中（夕）

敷板の中央が剥がされ、そこに焚火が焚か

れている。

焚火の明かりに浮かぶ、真黒に煤け、一部が朽ちた迦牟尼仏像。

焚火の脇に座る、赤ん坊を膝に抱いた戒山。赤ん坊は死んだように動かない。

長い長い間――。

バチツと燠が大きくはぜる。

戒山、瓢箪を一口呷る。

大切そうに赤ん坊を抱き、ゆっくりと立ち上がる戒山。
立て掛けてあった棧の外れた破れ障子から一片の障子紙を破り取る。

○川原（夜）

満天の星々――。

焚火が炊かれ、川原の石に腰を落とした赤ん坊を抱いた戒山。

戒山、瓢箪を一口呷る。

戒山「こゝここはのゝか、川原じゃ」
動かない赤ん坊を。

戒山「か、川はの、水が、な、流れておる」

法衣から出る寝ている赤ん坊に話し掛け
る戒山。

戒山「ば、婆さまのところに、行つとーとき、川は、
み、見たのう。川には、魚がいよる。魚はのう、
お、泳ぐんじゃ」

顔を頭上に向け、

戒山「空じゃ。今は夜での、ほ、星が見えるじゃ
ろう。ほれ、あの明るいのが星じゃ。ば、婆さ
まのところに、行つとーときは、お、お陽さんが
出てたじゃろう」

戒山、瓢箪を呷る。

戒山「この明るうて温いんは、焚火じゃ。その
白うて冷っこいのは、雪じゃ。これが石、あれ
が草……」

動かない赤ん坊を。

戒山「山も見たのう。山にはの、よ、ようけ樹が
生えておる。そこには、さ、猿や猪がおる」

戒山、瓢箪を呷る。

戒山「田や畑も見たじゃろう。米や蕪や芋がとれ

る」

赤ん坊のおでこを触り、

戒山「ぬ、ぬかじゃ」

眉を触り、

戒山「眉」

め、鼻、口を触り、

戒山「目、鼻、口……」

赤ん坊の手を取り出し、

戒山「う、腕じゃ。手じゃ。指じゃ。爪じゃあ」

戒山、瓢箪を呷る。

戒山「わしは坊主で、ぬしは、あ、赤子じゃ」

赤ん坊を頭上に掲げ、

戒山「よ、ようけ見とくんじゃ」

しばしの間赤ん坊を掲げた後、大切そうに

膝に抱く。

戒山「二度と生まれてこんように、この世をよお

しく憶えておくんじゃ」

戒山、懐から破いた障子紙を取り出し、傍

らの川のよどみに浸ける

戒山、赤ん坊の顔（口鼻）を濡れた障子紙

で覆う。

しばしの間――。

瓢箪の酒を呷る戒山。

カメラ、どんと引いていき、暗闇の中に満天の星々と小さな小さな川原に焚かれた焚火だけの画面となる。

戒山「この世はうたた寝。悪い夢を見ただけじゃ」

夜空に瞬く星々。

スーッと流れる一筋の流れ星。

完